頼宝撰『教眼鈔』考

千葉　正

一、はじめに

十四世紀に真言宗において東寺を中心として、所謂「東寺三宝」と後世、呼ばれる〔それは頼宝（一二七九―一三三〇？）、杲宝（一三〇六―一三六二）、賢宝（一三三三―一三九八）のそれぞれ師弟関係となる〕、代表的な学僧達によって教学復興というよりも「東寺教学」が確立される。その教学復興は十四世紀だけの僅か百年余の間だけといって良い期間が限られたものである。

しかし『真言宗全書』、『続真言宗全書』、『大正新脩大蔵経』等に収められる「東寺三宝達の著述の個々の研究は余り為されてはいないと考えられる。特に頼宝の教学に関しこの研究は全く為されてはいないと言える。頼宝に関しこの研究としては、歴史学の立場からの成果がある。代表的な先行研究としては櫛田良洪氏の『続真言密教成立過程の研究』「後篇真言密教の日本的展開第一章中世東寺教学の展開」、及び上島有氏『東寺・東寺文書の研究』が挙げられる。

したがって、本稿は頼宝の教学の特色を理解する上で重要な資料とも言える『教眼鈔』を中心に、特に新発見の筆者所蔵写本を用いて、その新出の写本を紹介しつつ、弟子の杲宝への影響も併せて考えてみることで東寺教学成立の一側面を考察してみたい。なお、本稿では紙幅の制限上『教眼鈔』の一部分を取り上げる止めたいと思う。

二、頼宝について

出身地は不明。延元二年（一三三七年）に後天皇の吉野行宮に参殿し、瑜祇灌頂を授ける。同四年（一三三八年）に再び参殿して菩提心論を進講したとされる。そして、東寺においては、宝菩提院を開く。正和四年（一三一五年）東寺学頭職に就く。そして、学頭職補任以降、春秋二季の伝法会、毎月十五日の鎮守講・毎月二十一日論義の実施が定められる。頼宝は、これらの法会整備に中心的な役割を果し、その結果として東

寺教学成立の基礎を築くのである。

三、『教眼鈔』について

中世真言密教において様々な談義、論義が行なわれる。その結果として多くの宗義決択書類（真言宗各流派ごと）と言われる著述がまとめられるようになる。そして、この十四世紀の東寺教学の中で頼宝の宗義決択書としては『真言本母集』全三十四巻（『続真言宗全書第二十一及び第二十二所収）が良く知られている。今回、取り上げる『教眼鈔』とは、内容・構成を述べてみれば、全一巻本で内容は「真言行者用心・即身成仏・煩悩断不断・体相用三大・事理分別・本不生・顕密所詮不同・一塵法界・四身義」から成るところの密教教義の主要問題十条を説述する。したがって『教眼鈔』は簡便な東寺教学の綱要書と言えよう。

四、『教眼鈔』の新出写本について

まず『教眼鈔』の流布の状況を述べてみたい。『教眼鈔』は、江戸期の刊本と写本のみの文献である。本稿では、龍谷大図書所蔵の江戸前期の刊本と、筆者所蔵の寛永七年（一六三〇年）の写本を紹介することにしたい。

次に『教眼鈔』に立てられている十条の論義から、杲宝に受け継がれていると考えらる、頼宝における禅宗理解についても、本稿では、その一端を併せて検討してみる。弟子の杲宝は、禅宗に対して、かなり批判的な側面が見られる。つまり、東寺教学における対禅宗の観点も、重要な位置を占めていると考えられるからでもある。なお、龍谷大図書館所蔵本には、江戸時代の年号としての「天和」（一六八一年から一六八四年まで）の年号が巻末に記されている。

杲宝に関しては、拙稿「杲宝の教学的特色について—中世真言密教思想史の一側面—」『仏教学』第44号、仏教思想学会、二〇〇二年三月、五五頁—七〇頁を参照して頂きたい。

では、新出写本と刊本との比較検討に入ることにしたい。

最初に両本の目次部分の章名の配列を見てみる。筆者所蔵本の目次は、次の様に立てられている。「一初学用心事、二即身成仏事、三煩悩断不断事、四体相用三大事、五事理分別之事、六本不生之事、七煩悩断不断事、八顕密所詮不同事、九一塵法界事、十四身義之事」、と以上のように立てられている。次いで、龍谷大所蔵の刊本では、教眼鈔目録巻本、初学用心事、即身成仏事、煩悩断不断事二條、体相用三大事、事理分別事、巻末、本不生之事、顕密所詮不同事、一塵法界事、四身之事」、と立てられている。

では、この筆者所蔵本と龍谷大図書館所蔵本とを、以上の目録の章名から比較してみると「煩悩断不断之事」という章（又は論義の算題）が注目できる。それは、刊本は一つにまと

めて立てられていることが分かる。（以下、龍谷大図書館所蔵本を刊本と略す）そして、写本は第三、第八問答に分かれている。この様に「煩悩断不断之事」という問答を、これ程詳しく論じている理由に、何か教義的に論じられなければならない背景が有ると考えられる。それは、仮説ではあるが、日本達磨宗の「本無煩悩、元是菩提」説、及び中古天台における所謂「本覚法門」における「俗諦常住」説や「遍計所執捨不捨」の問題[1]に対しての頼宝の何等かの意思表明と考えられる。

次に、写本の奥書には澄栄（一五八六―一六五〇）と英円という書写者の名が見られる[2]。

では、この「煩悩断不断」の問題について、弟子の杲宝には、どの様に承け継がれていったのかという疑問が生じるが、その疑問について、実際に杲宝の著述の中に見い出すことができるので、その著述について検討してみることにしたい。それは、杲宝の『開心抄』巻中に「不断煩悩門[3]」として立てられている。そして、この『開心抄』では『同抄』巻上には、激しい禅宗批判が説かれているのでもある。したがって、頼宝における「煩悩断不断」の論義の背景にも、ある程度の対禅宗という問題も関わるのではないかと言えよう。この「煩悩断不断」の問題は、真言密教の教学上、大変、重要な問題となっていたのである。それは、空海の説を用いて経証としていることが、杲宝の『開心抄』巻中の「不断煩悩門」の冒頭に見い出されるからなのである。この「不断煩悩門」の冒頭の問いでは、次の様な空海の言説が引用されている[4]。

問。大師釈云。不断煩悩即身成仏云云所云不断煩悩者其意云何。

ここでの空海の説が、どの著述からの引用であるのかは不明なのであるのだが、正に、この「不断煩悩」の問題は「即身成仏」説と結び付く、空海以来の真言密教教理上の最重要な問題であり、主題であると言える。

次に、前述した様に頼宝における「対禅宗」という観点から、具体的に禅宗に言及した著述として『諸法分別抄』という文献を取り上げてみることにしたい。この『諸法分別抄』という文献[5]は、次の様な十五ヶ条から成る論義問答でまとめられている。それは「身心本元事、六大事、五大形色因縁生事、五大本末分別事、五大通名輪事、五大五色中何為本事、法性内五大世間外五大分別事、五大重立離散本末事、五大相尅相生事、五大仮実分別事、諸法能成六大一異事、五字門四万六大分別事、五字有点無点事、色身法体同異事」という論義・算題から構成されている。

では、どの論義で、頼宝は禅宗に言及しているのかと言えば「身心本元事」という冒頭の論義で触れているのである。具体的に、その言及している箇所を見てみると、次の様な問答中に在る[6]。

問云。顕密教法雖異。善悪作業皆以心為先導。是通例法也。

法相大乗依二三界唯心経文一。万法唯識所変為レ宗。・・・（中略）・・・花厳経心如二工画師一造二種種五陰一云云三世一切仏心造二諸如来一云云・・・（中略）・・・説二楞伽経云一。未レ達二境唯心一。起二種種分別一。達二境唯心一。已分別不レ生。知二諸法唯心一。便捨二外塵相一。由二此分別息一。悟二平等真空一云云達磨一門以レ之為レ極。

かなり長文の引用となってしまったが、引用の末尾に明確に「達磨一門」とあり、禅宗を論じている。しかし、この箇所における禅宗は『楞伽経』の引用に基づいているところの、所謂「楞伽宗」のことを指すものである。したがって、頼宝は果して、日本の禅宗について論及しようとしているのかが問題となるところでもある。つまり、頼宝は、中国、唐代の禅宗を、日本を含めた禅宗の全体像として把握していたと考えられよう。しかし最近の研究に依れば[6]所謂大日房能忍の達磨守は日本天台側に残されていた唐代禅宗の影響を承ける禅宗であったとされている点から見れば、頼宝の禅宗に対する意識としては、大日房能忍系の達磨宗をも視野に入れていたとも言えよう。

では、具体的に『諸法分別抄』中の禅宗に対する、頼宝の見解について述べてみれば、この『諸法分別抄』の「身心本元事」という論義の中で説かれていることが問題なのである。本稿では紙幅の制限上、詳細な引用を省くが、頼宝は、真言密教の重要な教理である「即身成仏」説に基づく義論に、日本禅宗を引き込もうとしているのである。つまり「即身成仏」説をとる空海以来の真言密教と、禅宗の「即心是仏」説との比較になると考えられる。したがって、頼宝は、空海の立てた「十住心説」に基づくところの「九顕一密説」に由来する、真言密教の「即身成仏思想」の優位性を示そうしていたと言えよう。また、日本天台に対しての論義の中での主要な主題となっていた「即心」と「即身」との比較から、やはり「即身」を説く真言密教の優位性を主張するという、空海以来の伝統的な台密への義論とも関わるとも考えられる。

そして、この頼宝の禅宗観は、弟子の杲宝の禅宗批判の一つである「禅密一致説」を主張する禅宗（日本臨済禅）に対しての見解へと承け継がれていくと言える。

五、結びにかえて

以上の検討してきた結論から、次の様にまとめてみたい。

まず、新出写本と刊本とには章立て、つまり構成上の相違が見られたということである。それは「煩悩断不断事」という算題が一番、特長と言える。次に、頼宝から杲宝へと承け継がれていく教学的特色としては、仮説ながら「中古天台本覚法門」と禅宗とに対しての何等かの対応が考えられる。特に安易な「俗諦常住説」や大月房能忍系の達磨宗の「本無煩悩、元是菩提」の主張に由るところの「無戒無行説」に対し

ての論義であったとも言える。つまり、楽天的な即身成仏説への、真言密教側からの正統的な主張と考えられる。

以上、本稿を了えるに当って、頼宝の『教眼鈔』の貴重な江戸期刊本のコピーの労を取って頂いた駒沢大学図書館、並びに刊本を実際にコピーして頂いた龍谷大学図書館の職員の方々に、心より感謝を申し上げたい。

1　拙稿「杲宝の天台本覚法門理解」『印仏研』五〇―一、二〇〇二、十二

2　写本、一八丁左

3　『大正蔵』七七、七五六頁中

4　『大正蔵』七七、七五六頁中

5　『大正蔵』七七、七一四頁下

6　中尾良信『日本禅宗の伝説と歴史』（吉川弘文館、二〇〇五年五月刊）

〈キーワード〉　頼宝、杲宝、『教眼鈔』、『諸法分別抄』、『開心抄』、煩悩断不断

（駒沢大学大学院修了）

新刊紹介

小川　一乗

『小川一乗仏教思想論集』全四巻

第一巻　仏性思想論Ⅰ　定価八、八〇〇円

第二巻　仏性思想論Ⅱ　定価八、八〇〇円

第三巻　中観思想論　定価九、五〇〇円

第四巻　浄土思想論　定価九、五〇〇円

A五版・法蔵館・二〇〇四年～二〇〇五年

130. The Five *Abhisaṃbodhi* as Described in the *Wubu xinguan* and Japanese Esoteric Buddhist Correlations

Taichi TADO

This paper first examines the five *abhisaṃbodhi* (stages of meditation to attain buddhahood) as described in the opening passage of the *Wubu xinguan*. I then verify that this conception of the five *abhisaṃbodhi* is connected closely with that elucidated in both the *Zunsheng foding xiuyujiafa guiyi* (T. 973), the translation of which is attributed to Śubhakarasiṃha, and the *Zhufo jingjie shezhenshi jing*, translated by Prajñā. I conclude with thoughts on the dating of the *Wubu xinguan*'s formation.

131. Raihō's *Kyōgenshō*

Tadashi CHIBA

Raihō is the preist of the Shingon Sect belonging to the 14th century, master of Gōhō, and an advocate of the Tōji doctrine. I want to introduce a new manuscript of the *Kyōgenshō* by Raihō. The manuscript was written in the early Edo period, and was copied on Mt. Kōya. The *Kyōgenshō* describes the Sokushin jōbutsu theory.

132. Saisen's Interpretation of the *Shi moheyan lun*: Focusing on the interpretation of funi-mon

Yūgo TOYOSHIMA

The Shingon school in Japan attached importance to the *Shi moheyan lun* (Jap.: *Shaku makaen ron*), a commentary on the *Dacheng qixin lun* (Awakening of Faith) ascribed to Nāgārjuna, because the founder Kūkai used it many times in his works. Saisen (1025-1115), a scholarly monk of the Shingon school in the later Heian period, left a commentary on a part of the *Shi moheyan lun*. One of the characteristics of his commentary is that non-dual Mahāyāna (funi makaen) is active and has an entrance gate for non-duality